ショートショート『ｆ９』ｗｈｉｔｅｃａｐｓ

＃＃＃

全く、これは一体どう役立つのだろう。

クラスは今休み時間。クラスのみんなは友達と一緒に談笑している。ここは5階だ。窓からは五月の風が入り、カーテンが陽光の中揺れている。

貴則はその銀色の円盤のようなものを見つめていた。傾けたり、のぞき込んだりして精査する。円盤は中央に穴が開いており、ある一方の面は銀色の円の筋に虹のようなカラフルな色が見え、もう一方の白い面にはなにやら英語が手書きと印刷で書いてあった。

「なになに、フェドラ9　リナックス　ライブ

シー・ディー？　シーディー・アール　７００メガバイト」
なんだこりゃ。貴則はもう一度銀色の面のほうを見てみる。何も書かれていないし、じっと見ていると目がクラクラしてくる。よく見ると自分の顔が奥の方に映っているのがわかった。

「貴則君、なにそれ。」
横でクラスの女子の仁美が聞いてくる。
「よくわかんない。なんか、お父さんから、田舎のばあちゃんが残したものだっつって貰ったんだけど、なんだろうなあ。」
「ふーん、変なもの持ってるわね。」
「その言い方なんか俺が変って言われてるみたいなんだけど」
「そうね、変よね」

貴則は渋い顔をしたあと、その銀色の円盤を机の道具箱の中に片付けた。

貴則は柳浦（やなぎうら）小学校の生徒。前日に父親から死んだ祖母の形見だとして銀色の円盤を貰った。しかし貴則はそれがなんなのかわからなかった。父親の話によると「これは絶対に役立つもの」だと祖母が言っていたと言うが、その意味もわからない。その祖母は知る人ぞ知る伝説のハッカーだったそうだが、その言葉を残すと死んでしまったそうだ。

「これ聞いたか？　こんどトニーが出した光学攻撃装置。こんなのほしーよな。」

奥ではクラスの男子たちが話しているのが聞こえる。

「あ、『ライトニング』だろ？　それニュースでやってた。」
「１２００ドルだって。ちょっと俺たちじゃ買えないよなあ。」
「私こんなの持ってたら夜道安心して歩けるわ」
仁美も話しに入る。
「でも、それって悪用されるんじゃないかって言われてるんでしょ？」
「燈項会が悪用するんじゃないかって、ママが言ってた。」
「燈項会って言えば、このまえ首相官邸に侵入しようとしたテロ組織だろ？」
「そうそう、警備員の人が射殺されたって。」
「怖いよねぇ。」
学校の生徒たちの間では、トニーが製造したモバ

イル光学攻撃装置「ライトニング」が、警察に配備されたことが話題になっていた。ちなみに値段は１２００ドル。当時の小学生の月当たりの小遣いは物価が上がって１００ドルだったが、高くて買えない金額だ。しかし、その「ライトニング」はその危険性から何か悪事に使われるのではないかと危惧されており、法律で警察以外の所持を禁止しようという動きもあった。製造元の巨大企業トニーはそれに反対していたが、実際最近暗躍しているテロ組織集団「燈項会」がライトニングを不正改造して悪用しようとしているとメディアでは報道されていた。

「おーし、おまえらー！　授業だ席に着けー」

英語科の女性教諭である宮下先生が扉を開けて教室に入ってくる。この先生は担任の先生でもあ

る。社会科の田村のウンザリするほど長い講義に飽き飽きしていた貴則は、これで少し眠れるとホッとした。

「ｆｅｅｌ は『感じる』って意味だぞー。」

授業は英語の授業。貴則は

「こんな簡単な英語いちいち勉強する必要もねえよな。」

と心の中で呟いた。普通の小学生たちは基本的な英語はマスターしていた。こんな簡単な授業をするのは文部技術科学庁のお偉いさんの頭が固くて時流に乗って行けてないせいだ。

先生は「フォトグラフィー」と呼ばれる情報記録装置をとりだして、教科書の説明をはじめた。フォトグラフィーは琥珀色をした半透明の小さな

立方体の物体で、情報を約２ＴＢ記録できる。現代の小学生は誰でも持っている授業を受けるための必須品だ。貴則は７００ＭＢと書かれた銀色の円盤を思い出して、あれはもしかしてメガバイトのことなのかと気がついた。いったいどれだけ小さければそんな容量になるだろう。

教室の前の、窓から吹き込む風に微かに揺れているカレンダーを見ると、カレンダーは５月１４日を指していた。もちろん年は２０５８年だ。そして、貴則はさっき教室で話されていたライトニングについて思いをはせた。

ライトニングはそれまで研究されてきた大規模な光学攻撃装置を小型化（と言っても人の背丈ぐらいの大きさはある）して実用化したものだが、光

学攻撃装置というものもなかなか難しいものだ。大体テレビでＣＧで見るような光学攻撃装置といったものは、光の通り道も光って見えるものだが、実際のところレーザーでそれを実現しようとしても難しい。レーザー光では光は完全に直進するだけなので光の通り道は見えないからだ。それを可能にしたところがトニーの特許技術なわけだが、この特許内容は明かされておらず、それはブラックボックスになっていた。また、実用から考えれば光の道筋は見えなくても問題ないし、見えない方が隠密の行動にはもってこいなのだが、ムダに見た目のインパクトを考えるのがトニーと言う企業でもある。

考え事のせいで授業をほとんど聞かなかった貴則は、放課後に学校の先生に「銀色の円盤」につい

て聞いてみることにした。どうせうちに帰って父親に聞いても、あの子供をからかうのが好きな父親はしらばっくれて話そうとしないだろう。

「イースター島って結構東にあるんですね。」

掃除が終わって先生のところに行くと、仁美が先生に勉強の内容について聞いている。まわりの生徒はもうみんな帰ってしまった。貴則は話が一段落付いてのを見計らって聞いてみた。

「先生、この銀色の円盤が何か知ってる？」

「あ、それ、さっきの変な円盤。」

仁美も反応する。

その変な物体について聞くと、先生は俄然興味を示した。

「それって昔使われていた記録装置よ」

「記録装置？」
「そう、確か今は使われてないＯＡ室にそれを読み込むための装置が置いてあったと思うわ。ほら、今はフォトグラフィー使うけど、私が子供の頃の時代はブルーレイディスクって言って、銀色のディスクのようなものを使ってたの。これはコンパクトディスク――ＣＤって言うみたいだから、たぶんブルーレイより前の記録媒体ね」
「ＣＤ……？」
先生が返そうとしたその「ＣＤ」を仁美が手に取った。
「あ、これ、リナックスって私聞いたことある。それ、昔のＯＳよ」
仁美が言う。
「ＯＳ？」
「ほら、うちの学校はＥｘｐｒｅｓｓｉｖｅ使っ

てるけど、昔はこういうＯＳがあったんだって、お祖父ちゃんが言ってた。今は３Ｄが当たり前だけど、この頃はまだ２Ｄインタフェースで。」

「ふーん。」

「私、そのＯＡ室にあるっていう昔のパソコンも使ってみたいなあ。」

仁美がわくわくしたよう目で宮下先生にいう。

「ＯＡ室のパソコンは今はＯＳも含めたソフトを全部抜いてあるから、使えないらしいのよね。教頭先生が言ってた。」

「えー、残念」

仁美は肩を落とした。そんなこんな話をしながら貴則が「ＣＤ」をもう一度眺めたときだった。それはいきなりだった。

ドカーン！

爆発音がして、爆風と轟音と共に教室の窓ガラスが吹き飛んだ。
「キャア！」
「一体なに！？」
一瞬で教室の床や机の上は割れガラスだらけになった。仁美が窓の近くに駆け寄り下を見下ろす。
「仁美、危ないわ、離れなさい！」
宮下先生がかけよったが、窓の外を見た先生は息をのんだ。貴則も二人のところに駆け寄る。
見下ろすと、学校の正門あたりが黒煙に包まれている。見ていると、その爆煙の中を数台の黒塗りの車が通り抜けてグラウンドに侵入してきた。
「うごくな！我々は燈項会だ！君たちの身柄は完

全に我々の監視下に入っている。抵抗せず我々の指示に従え！」
その車は拡声器を使って大音響で宣告した。
銃を持った全身黒タイツの男たちが車から降りると、下校しようとしていた校庭の子供たちに銃を向けた。警備棟からは対抗すべく学校の警備員が銃を構えて出てきて、銃で反撃しようとする。銃撃戦が始まった。しかし、その時閃光がグラウンドに走った。警備員たちが閃光を受け次々に倒れる。奥からキャタピラ（商標名）をつけた銀色の、人の背丈ほどある物体が現れた。
「あれ、ニュースで見たことある！」
仁美が叫ぶ。
「あれは……ライトニングだわ！」
貴則たちは絶句した。

じき子供や教職員は武装した男たちによって囚われた。そして騒ぎを聞きつけたマスメディアのヘリが周辺を飛ぶ中、燈項会は拡声器を使って宣言した。

「我々は刑務所に囚われている我々のリーダーの解放を求める！　警察は交渉にのれ！　受理しない場合は子供らを人質として殺す！――」

「はぁ、はぁ、はぁ」

貴則たちは先生の先導の元で、裏門に向かうべく階段を駆け下りた。早くしないと武装勢力に見つかるかもしれない。早く逃げないと。しかし、その時校内に放送が入った。

「我々は燈項会だ。君たちの身柄は完全に我々の監視下に入っている。抵抗せず我々の指示に従

え。我々の監視下に入らないものは、粛正する。校内にいるものは速やかに職員室前、または放送室前、または正面玄関に集合せよ」
あちこちのスピーカーから燈項会のメンバーのくぐもった声が聞こえる。
「先生、放送室が燈項会に占拠された！」
仁美が廊下を走りながら心配そうに言う。
「くそ、職員室も？　いい、二人とも私から離れないで。」
先生が貴則と仁美にいった。貴則たちは廊下を慌てながら走っていたが、奥から軍靴で歩く音がしてくる。ダダダダッと音がすると、廊下の死角から壁に連射された銃弾の光が見えた。
「こっちはダメだわ。こっちよ！」
進路を変えて貴則たちは逃げる。しかし
「こら、そこに誰かいるな。止まれ！」

そちらも見つかってしまった。
「どうするの、先生！？」
先生は一瞬迷ったが、
「この部屋に入るのよ！」
特別教室の重い扉を開け、中に貴則たちを誘導した。中はブラインドの奥から夕方の光が薄く差し込むだけで、薄暗い。貴則たちが入ると先生は取っ手をガチャンとおろして、カギをかけた。ハアハアと荒い息づかいだけが聞こえる。
「ここ、……古いパソコンが置いてある。」
貴則は呟いた。
「ＯＡ室だわ。」
仁美が震えながら部屋の中を見回していった。
その時また放送が入った。
「時間切れだ。今我々の監視下に入らず逃げたり

隠れたりしているものは見つけ次第即刻始末する。以上」
ぶつっと放送がきれる。
教室が静寂に戻ると、
「う、う。」
仁美がしゃくって
「うわーん、えーん！」
我慢できずに泣き出した。
「ちょっと仁美、今は静かにしないと！」
先生が嗜める。
「う、わ、私たち、殺されちゃうのかなー。」
仁美がなおもぐずる。
「カギを閉めたからそう簡単には入ってこれないはずよ。安心しなさい。」
しかし、その時廊下からした燈項会員の通信が三

人を震え上がらせた。
「こちらパトロール！、ライトニングの利用を申請する。１階ＯＡ室にライトニングを回してくれ」
三人はその言葉を聞いたあと少しの間無言で固まっていたが、ついに仁美が今度は本当に大声を上げて泣き出した。
「まいったなあ、こんなんならもっと昨日の夜ゲームやっとくんだった。」
貴則は頭を抱えた。
「今そんなこと言ってる場合じゃないでしょ。どうやって助かるか考えないと。」
先生が言う。
「たすかるって、どうやって？」
仁美がしゃくり上げる。
「何か方法があるはずだわ。ええっと、ええっ

と……。」

その時、雲が切れたのだろう、太陽の光がブラインドの隙間からはいって、貴則が持っていたＣＤがキラリと光った。

「そうだ、それよ！」

先生は準備室に入り奥からＣＤドライブをひっくり返してきた。ＯＡ室の古代的なコンピュータにＣＤドライブを接続し、ＣＤから起動を試みるのだ。

「このパソコンにはＯＳがはいっていないけど、そのＣＤには入ってる。昔のＯＳでもＨＴＴＰでネットにつながれば通信できるはずだわ。警察に私たちがここにいるって伝えないと。裏門の開放も命令してみて。パスワードは私が知ってるから。できたら警備システムも起動して――この部

屋のシャッターを下ろせれば時間が稼げるわ！」
「そんなあ、いっぺんに言われても覚えられないよ。」
貴則が悲鳴を上げる。
「何言ってんの、急がないと！私たち殺されるかもしれないのよ！」
とにかく貴則はＣＤをドライブにセットした。電源ボタンを押すと、グイーンと起動音が鳴る。そしてドライブからがりがり音がした。

しかしホコリだらけだったＣＤドライブが不良なのか、はたまたＣＤのデータに不整合があるのかＯＳは起動しない。ＣＤを何度も入れたり出したりするが起動しない。
「はやく、はやく！」

仁美と先生がせかす。
「ＯＡ室に隠れている者どもよ聞け！　おまえたちの死は決まった。粛正する。」
扉の奥の廊下から拡声器で大きな声が聞こえる。
ビーン！ジュアー！
そうこうしているうちにＯＡ室の金属の扉が線状に光り始めた。線は赤く染まり、溶けている。奥からライトニングが光学攻撃をしているのだ。ＯＡ室の扉が焼き切られると、扉がドターンと音を立てて倒れ、
ギュィーン！ガタガタ！
遠隔操作のライトニングが扉の奥から入ってき

た。廊下の光の逆光でライトニングが黒く影に見える。

「うわぁああ！」

貴則らは後ずさりしながらそれを見て、声を上げた。

ギュイーン！

影になっていたライトニングが眩しいほど光る。そしてライトニングの光の凶刃が三人に向けられたとき、――

貴則は無意識のうちに手で顔をかばった。

ギューン！ズカーン！

三人は息を止めた。ただ轟音のようなうなりがあたりに立ちこめる。三人が顔をかばっていた腕をそろりそろりとおろすと、そこにはライトニングの残骸があった。

ライトニングが閃光を放ったとき、貴則が持っていたＣＤの裏面で光が反射されライトニングにあたり、ライトニングが破壊されたのだった。ライトニングの反射した光はライトニングだけでなくＯＡ室に迫っていた数人の燈項会メンバーを戦闘不能にした。

その様子にしばらくあっけにとられていた三人だったが、幸運に助けられたらしいということに気がつくと、ＯＡ室から飛び出した。

「早く、今のうちに逃げるのよ！」
先生の先導のもと二人もすぐ続く。
――その後、貴則たちは裏門近くのフェンスを越え学校から脱出した。
三人は待機していた警察に無事保護された。夕焼けもすぎ、暗闇の街灯の光の下で、三人は報道陣のフラッシュの中、泣きながら助かった喜びを分かち合った。
主力戦力であるライトニングを失ったことを知った燈項会メンバーは逃走した。警察は配備済みの警察のライトニングを活用して燈項会を一掃し、学校を解放。その後の調査でわかったことだが、燈項会はライトニングを今回の事件のために一台

しか用意していなかったことがわかった。つまり、貴則のＣＤに破壊された一台で全てだったのだ。それは、幸運なことだった。犠牲者はいくらか出たが、この事件はこれで解決した。

トニーは今回のことについて世間の批判にさらされて、ライトニングの警察以外への販売規制を受け入れた。しかしライトニングの弱点が光の反射だということがわかった今、ライトニングの実用性について厳しい意見が出されるようになったのはいうまでもない。

そして後日、犠牲者を悼む集会の黙祷の時、貴則はすっかり「焼けた」ようになった「銀色の円盤」を胸に掲げながら、心の中で呟いた。

「ばあちゃん。ＣＤ、本当に役に立ったよ。

――」

時代を越えて輝く願いがある。

Ｆｅｄｏｒａ９´ ココーヤゆめ ■（２００８．５．１４）